

彙報

相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

相愛大学総合研究センターでは、本年度より学内の様々な分野の教員の専門的知識を活用し、また教員間の交流を活性化することを目的に、共同研究を発足した。その最初のプロジェクトとして、「日本における諸学問の近代史」と題された共同研究を行っている。同共同研究は、2014年度まで各年度5回の研究会を中心に進められる予定である。

「日本における諸学問の近代史」研究会は、日本近代における様々な学問領域の展開を、単なる学説史として整理するのではなく、学際的に再構成することを通じて日本近代の一断面を把握するとともに、学問が日本近代の社会において演じてきた役割を再検証することを目的にしている。同研究会は学内の教員を主要なメンバーとしているが、学外からも講師を招聘し、また学内外を問わず参加者を募り、開かれた共同研究として開催されている。その成果は、各年度末に公開講座において紹介し、さらに共同研究終了後にあらためて公刊する予定であるが、ここに第1回から第5回までの研究会の概要を報告する。各回の概要は以下の通りである。

第1回

報告者：嘉戸一将（相愛大学人文学部准教授）

テーマ：「形なき形」を把握すること——

法的諸概念の受容と変容

日時：2012年7月25日（水）

午後5時～午後7時30分

場所：相愛大学6号館234号室

参加者：8名

嘉戸一将による報告は、西洋から受容した法

的諸概念が、日本においてどのように変容し、それらによってどのような法学説が展開されることになったのかを再検証するという趣旨であった。同報告が前提としたのは、法的諸概念が抽象化された形式的なものであり、そのため明治期においては難解なため特殊な理解の仕方から諸概念の変容が生じたということである。その際、とりわけ注目されたのは法的人格概念であり、明治期に人格概念が身体的な概念として理解され、そこから後には特殊な国家法人説や、人格の精神性に関する言説などが生まれたこと、さらに昭和初期には西田幾多郎ら哲学者たちが「形なき形」を把握することを日本文化の特性であると提唱し、諸概念の形式性に立ち返り、それらを再定義しようと努めたことなどが指摘された。

報告後には質疑応答が行われ、特殊な国家法人説と「国体」論との関係性、人格概念の理解における身体的イメージの意義、文学における人格概念の問題、日本文化における血統の観念の占める位置、訳者の関心によって生じる訳語のバイアス、人格をめぐる法的言説と倫理的言説との関係などについて討議され、日本の近代化の特質を把握するための方法の深化が図られた。

第2回

報告者：鳥井正晴（相愛大学人文学部教授）

テーマ：漱石の作品を読む（「倫敦塔」から「明暗」まで）——研究という名の汽車に乗って

日時：2012年9月26日（水）

午後5時～午後7時30分

場 所：相愛大学本部棟 A 107 号室

参加者：16 名

鳥井正晴氏による報告は、日本近代文学のなかでも、とくに夏目漱石に焦点を合わせて行われた。すなわち、漱石の学問的経験の出発点に漢詩・漢文学があることがもつ意義、「倫敦塔」によって小説という西洋的文学形式を用いた表現者として歩み始めたこと、その小説家としての表現者の足跡が敗戦後、ようやく研究され始めたこと、そして最後の作品「明暗」と漢詩との関係性など、多岐にわたる論点が呈示された。報告においてとりわけ注目されたのは、漱石にとって詩作（漢詩）があくまでも個人的な當為^{あたふ}だっただけに自己と真摯に向き合う意味もっていたこと、「倫敦塔」の虚構性が普遍的な文学の虚構性でありつつも、小説という西洋的文学形式を要請したこと、昭和 40 年代に漱石研究の動向に転機がもたらされたこと、さらに従来^{しゆらい}の研究ではあまり注目されることのなかった漢詩と「明暗」との関係性であった。

報告後には質疑応答が行われ、漢詩・漢文学と小説との関係に関する漱石自身の認識、日本近代文学に関する研究が敗戦後に緒^{いと}についた背景、漱石研究のみならず他の研究領域においても昭和 40 年代に転機が認められること、漱石の漢詩から窺えるのはその関心が必ずしも非近代的なものにあつたのではないことなどについて討議され、日本の近代の諸相を慎重に分析する必要性が確認された。

第 3 回

報告者：小野正嗣（明治学院大学文学部専任講師）

テーマ：日本におけるフランス文学研究の始まり

日 時：2012 年 10 月 24 日（水）

午後 5 時～午後 7 時 30 分

場 所：相愛大学 6 号館 234 号室

参加者：8 名

小野正嗣氏による報告は、日本における黎明期のフランス文学研究の特質を、現代のフランス文学研究の潮流との比較から明らかにする趣旨であった。すなわち、帝国大学（現・東京大学）に仏蘭西文学科が設置された 1889（明治 22）年にフランス文学教育を担当したのは、同分野を専門とする研究者ではなく、フランスの修道会に属するフランス人であり、また日本人として最初の教員となった辰野隆^{ゆたか}は修辞学としての文学研究を重んじたことから、日本における黎明期のフランス文学研究は今日のそれとは異なるものであつたことが示唆された。他方で、当時のフランスでは、ドイツ文献学的手法を用いた研究が科学的方法として主流を占めるようになっており、フランス留学の経験のある辰野は敢えて古典的な立場を選んだと言える。しかし、その後、日本でも文献学的方法が主流を占めることになり、そのことは文学研究と文学との乖離をもたらしたと指摘された。黎明期のフランス文学研究の特質は、この乖離の問題を再考するうえで一つの視点を提供していると言えるだろう。

報告後には質疑応答が行われ、同時期の国文学研究の動向、国学的手法と文献学的手法との親近性、英文学研究の動向、明治・大正期の知識人の文人的余技などが指摘され、戦前の知的環境について討議された。また、官立大学のみならず、私立大学における当時の文学研究・教育の潮流についても今後調査することで、日本における文学研究の近代を把握することが可能であることが確認された。

第4回

報告者：川中美津子（相愛大学人間発達学部教授）

テーマ：日本における服飾美学研究の始まり

日時：2012年11月21日（水）

午後5時～午後7時30分

場所：相愛大学6号館234号室

参加者：9名

川中美津子氏による報告は、服飾美学がその対象とする研究領域とその基本的関心とを明らかにしたうえで、それらが確定した時期と様相、さらに現代の服飾美学が直面する問題を論じる趣旨であった。まずその研究領域の確定時期については、家政学が成立し、「容姿を飾る」ものとして衣服が捉えられた1890年代にまで遡ることができる。とはいえ、その後、衣服はもっぱら健康を維持・増進するためのモノとして研究されたために、服飾美学研究の成立にまでは至らなかった。衣服が美的・意味論的関心から研究対象（「服飾」）として立ち現われるのは、服飾美学が講義や講座として確立され、さらに学会が形成された1950年代後半から1960年代のことだった。そこでは、服飾の象徴性や制度性に焦点が合わせられ、時代や地域によって異なる文化的特性が研究された。そのような意味において、服飾美学研究とはそれぞれの文化の美意識や意志の表出であると言えるだろう。しかし、現代の日本においては、趣味や嗜好の多様化、さらにはそれを支える産業主義的な消費文化のために、服飾美学研究は困難に直面しているという。

報告後には質疑応答が行われ、家政学の歴史、女子教育機関が裁縫学校を沿革としている意味、有職故実など日本における服制との関係、服飾美学における「美」や「美学」の概念などについて討議された。時代や地域によって

異なる「美」と制度との関係性や変化を分節化するとともに、大学をはじめとする研究教育制度の編成を把握することで、一時代・一文化に胚胎された実践的美の探究手法とその学知のもつ可能性が確認された。

第5回

報告者：中村圭爾（相愛大学人文学部教授）

テーマ：東洋史学の近代

日時：2012年12月20日（木）

午後5時～午後7時30分

場所：相愛大学6号館234号室

参加者：7名

中村圭爾氏による報告は、日本における東洋史学の歴史を踏まえつつ、近代の歴史学の方法論を問うと同時に、歴史上の近代の意味を問うという趣旨であった。すなわち、実証主義の受容によって始まった日本近代における歴史学は、権力による正史編纂の東洋の伝統に見られる史実の歪曲を脱却すべく客観的な歴史記述を目指したが、その客観性は政治的中立性ゆえに植民地主義に対して無力であり、敗戦後、マルクス主義的観点が導入され、戦前の歴史学の克服が試みられた。しかし、マルクス主義歴史学もまた発展段階論などに、単なる時間観念を超えた西欧固有の政治的認識が認められ、必ずしも戦後歴史学は完全な客観主義・政治的中立性を実現したとは言えない。そこから浮かび上がるのは、「近代」という時代区分が、単なる歴史学の時代区分や方法論的枠組みではなく、歴史の終末に向けての運動を意味する概念でもあり、この運動には目的や価値観が込められているために自ずと主観性や政治性を帯びてくるということである。歴史学者はこの主観性や政治性を実践性と呼び肯定してきたのだが、西欧的な運動の目的と価値観を必ずしも共有してこな

かった「東洋」の歴史的観点からすると、「近代」は問われざるを得ないのである。

報告後には質疑応答が行われ、参加者それぞれの専門分野における「近代／現代」などの時代区分、マルクス主義の発展段階論における「近代」の意味、西洋的な直線的時間観念とは異なる歴史学の分析枠組みの可能性などについ

て論議された。それぞれの専門分野における「近代」あるいは「現代」の意味を把握するとともに、学問にとって「近代」とは何であるかという問いを今後、研究会のひとつの軸として検討する必要性が確認された。

(文責：嘉戸一将)

相愛大学 総合研究センター後援

食と防災シンポジウム

「備えてまっか〜！まさかの時の食」

東日本大震災の被災地での支援活動等を知ることにより、私たち一人ひとりが日頃の備えの重要性を認識するとともに、このシンポジウムを通して「食と防災の視点」から自助（個人）、共助（地域、大学など）、公助（行政）の必要性の理解を深めるため、大阪府民を対象に企画した。大学は共助の立場からも広く地域との連携・支援を考えていくことが重要であり、今回のシンポジウムに関して相愛大学・総合研究センターの後援を受けたので、その概要について報告する。

今回、300名の募集に対して438名の参加者があり、大阪府民にとっても非常に関心の高いテーマで、アンケートにも「シンポジウム等の継続を望む」との意見が多く寄せられた。

1. 開催時期（日時）

平成24年9月19日（水）

13時20分～16時10分

2. 開催場所

相愛学園本町学舎 講堂

3. 参加者数

438名

4. 参加者の概要

一般府民、食生活改善推進員、行政栄養士、学生、食品企業、他団体・機関関係者、取材など

5. 開催内容

進行：大阪府健康医療部健康づくり課

課長補佐 西本香代子 氏

(1) 開会挨拶

大阪府健康医療部健康づくり課参事

辻村 雅仁 氏

(2) 講演Ⅰ（13:30～14:20）

「災害時における自衛隊の役割と活動」

自衛隊大阪地方協力本部募集課長

河合 龍也 氏

「行政の備蓄について」

大阪府政策企画部危機管理室消防防災課主査

山脇真奈美 氏

(3) 講演Ⅱ（14:20～15:00）

「みんなが助かる台所防災術のすすめ」

相愛大学客員教授、農林水産技術会議委員

坂本 廣子 氏

(4) シンポジウム（15:10～16:10）

「備えてまっか〜！まさかの時の食」

シンポジスト

・坂本 廣子 氏（前掲）

・藤原 政嘉 氏（(社)大阪府栄養士会会長、大阪青山大学健康科学部教授）

・北村 壽子 氏（大阪食生活改善連絡協議会会長）

コーディネーター

太田 美穂（相愛大学人間発達学部教授）

(5) 閉会挨拶

農林水産省近畿農政局大阪地域センター

小野 哲士 氏

【展示コーナー（12:30～16:30）】

・「私の台所防災術」

坂本 廣子 氏

・「自衛隊員の携帯食等」

自衛隊大阪地方協力本部

・「東日本大震災における支援活動紹介」

大阪府保健所栄養士

・「大阪産（もん）の紹介」

大阪府環境農林水産部

・「食べて応援しよう」

近畿農政局大阪地域センター

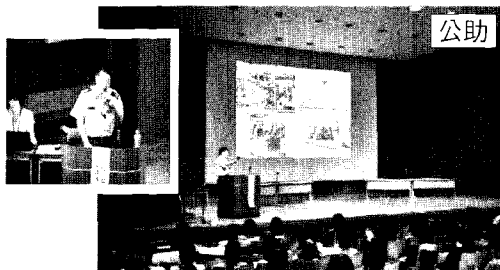
- ・なお、本事業は大阪府、相愛大学、農林水産省近畿農政局大阪地域センターの主催で実施された。相愛大学総合研究センターと共に後援を行ったのは（社）大阪府栄養士会、大阪府食生活改善推進連絡協議会、健康大阪 21・食育推進企業団である。協賛は、大塚製薬株式会社大阪支店、三島食品株式会社大阪営業所、株式会社宮源の3社であった。
- ・当日の会場設営、受付、後片付けなどに相愛大学人間発達学部発達栄養学科の学生がボランティアとして協力した。
- ・なお、入場時にアンケートを配布し終了後、アンケートを回収した。（回収率 71.7% 314名）

第1部 講演

講演Ⅰ 「災害時における自衛隊の役割と活動」

東日本大震災での支援活動を紹介

河合 龍也 氏



「行政の備蓄」大阪府の備蓄の現状について

山脇真奈美 氏



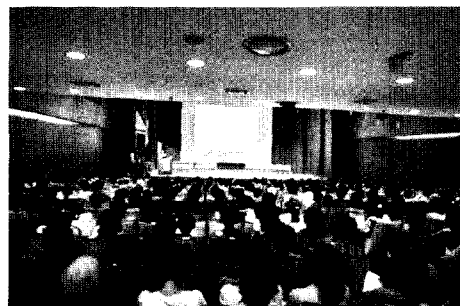
講演Ⅱ 「みんなが助かる台所防災術のすすめ」

坂本 廣子 氏



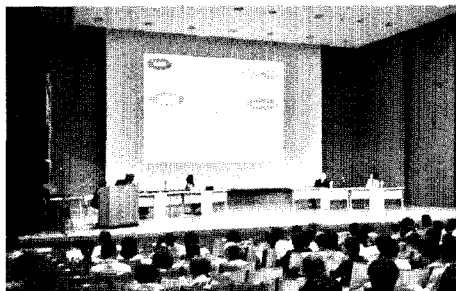
《阪神淡路大震災被災の経験を生かす
自助に関して具体的な事例を多く紹介》

《熱心に聴き入る会場内の様子》



第2部シンポジウム

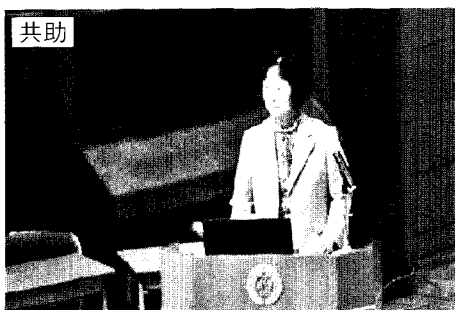
テーマ「備えてまっか～！まさかの時の食」



自助（個人）・共助（地域、大学）・共助（行政）とは？

《東日本大震災での食生活支援活動の紹介》
「地域密着型の機動力のある食事作り支援」

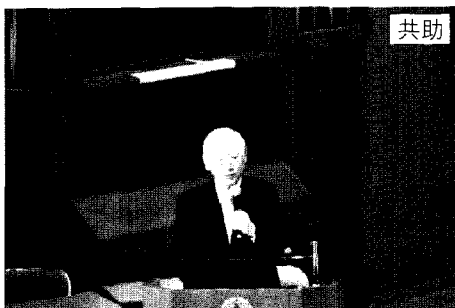
北村 壽子 氏



《管理栄養士の立場から》

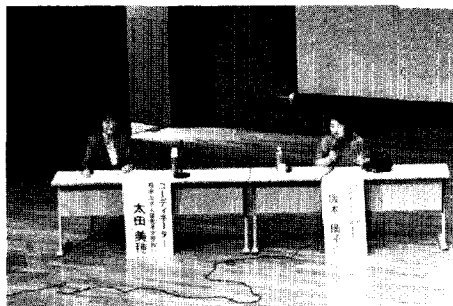
「支援活動の実際とこれからの食の課題」

藤原 政嘉 氏



シンポジウム後半

《会場からの質問に答える坂本廣子氏》



アンケートの結果より（一部紹介）

- ・シンポジウムは毎年継続してほしい。
- ・自助の大切さを具体的に知ることができた。
- ・食料の備蓄について理解が深まった。

【展示コーナー】



《坂本廣子氏のコーナー》



多くの方が各ブースを訪れ、自助に役立つ展示品等を手にとって確かめていました。

《行政栄養士による支援活動紹介パネル》



【作成したチラシ】



《自衛隊隊員による携帯食（非常食）の説明》

ふだん見ることのできない貴重な展示でした。



【実行委員会】

相愛大学人間発達学部発達栄養学科
 水野 浄子 (副学長)、太田 美穂 (教授)、
 多門 隆子 (教授)、村井 陽子 (准教授)、
 庄條 愛子 (講師)、堀野 成代 (助手)
 大阪府健康医療部健康づくり課
 西本香代子 (課長補佐)
 大阪府環境農林水産部農政室推進課
 谷 由美子 (主査)
 農林水産省近畿農政局大阪地域センター
 勝目 健一 (主任農畜産安全管理官)
 森本 素子 (農畜産安全管理官)

(文責 太田美穂)

相愛大学総合研究センター後援

ヤングリーダーフォーラム

「マジごはん by OSAKA “ちゃんとたべよか〜”」推進プロジェクト

府内の高校生や大学生が地域や学内でやっているさまざまな活動を取り上げるために平成23年度に立ち上げられた産官学連携による「マジごはん計画^{*1}」推進プロジェクトの後を受け、第2弾としてヤングリーダーフォーラム「マジごはん by OSAKA “ちゃんとたべよか〜”」推進プロジェクトが実施された。地域連携での食育ヤングリーダーの育成^{*2}は若い世代の健康づくりに貢献するものであり、大学が支援できる内容も多く、相愛大学・総合研究センターは後援を行ったのでその概要について報告する。

1. 開催時期（日時）

平成24年12月26日（水）

13時00分～16時30分

2. 開催場所

相愛学園本町学舎 講堂

3. 参加者数

326名

4. 参加者の概要

発表学生／生徒（40名）、応援学生／生徒（91名）、大阪府民／他府県民（140名）、

（管理）栄養士・教師、食ボランティア、取材など（55名）

5. 開催内容

(1) 開会挨拶

農林水産省近畿農政局大阪地域センター所長
小野 哲士 氏

(2) 第1部：（13：00～15：00）

食育ヤングリーダー育成支援事業参加校の活動発表会「めざせ！ 食育ヤングリーダー」
・大阪府立芥川高等学校・大阪府立茨木西高等学校・大阪府立園芸高等学校・大阪府立北かわち阜が丘高等学校・大阪府立能勢高等学校・大阪大谷大学・大阪女子短期大学・大阪成蹊短期大学・大手前栄養専門学校・相愛大学・帝塚山学院大学（人間科学部、畑部）・箕面学園福祉保育専門学校（13グループ）

(3) 第2部：

「竹下和男先生と食育ヤングリーダーとの公開セミナー」

竹下 和男 氏
参加校代表者

(4) 第3部：

「食育ヤングリーダー育成支援事業」表彰式

(5) 閉会挨拶

大阪府健康医療部健康づくり課参事

辻村 雅仁 氏

【展示コーナー（12：30～16：30）】

・「マジごはん計画」

農林水産省近畿農政局大阪地域センター

・「大阪産（もん）の紹介」

大阪府環境農林水産部農政室推進課

・「大阪農業を紹介」

大阪府農業協同組合中央会

・「大阪府食育推進計画の紹介」

大阪府健康医療部健康づくり課

・「健康おおさか21・食育推進企業団活動の紹介」

健康おおさか21・食育推進企業団

・「うちの店も健康づくり応援団の店」

大阪ヘルシー外食推進協議会

・「正しいお箸の持ち方チェック」

【平成24年度食育ヤングリーダー育成支援事業
活動発表会審査員（敬称略）】

大谷紀美子（相愛学園 学園長）

岡本 真澄（大阪府教育センターカリキュラム研究室指導主事）

小野 哲士（前掲）

河合 繁一（(社)大阪府歯科医師会）

北村 壽子（大阪府食生活改善協議会会長）

小林 寛弘（健康おおさか21・食育事業団代表）

藤原 政嘉（(社)大阪栄養士会会長）

西江 明洋（大阪府環境農林水産部農政室推進課長）

永井 伸彦 審査委員長（大阪府健康医療部保健医療室副理事長兼健康づくり課長）（代理健康づくり課参事 辻村 雅仁）

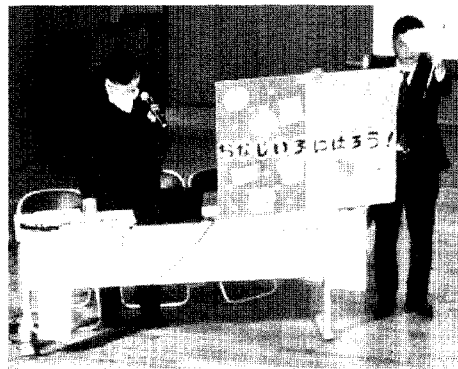
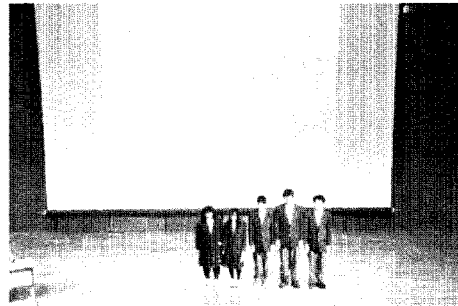
- ・なお、本事業は大阪府、相愛大学、農林水産省近畿農政局大阪地域センターの共催で実施された。

相愛大学総合研究センターと共に後援を行ったのは(社)大阪府栄養士会、大阪府農業協同組合中央会、大阪府食生活改善推進連絡協議会、健康大阪21・食育推進企業団である。

- ・当日の会場設営、受付、後片付けなどに相愛大学人間発達学部発達栄養学科学生（3回生9名）がボランティアとして協力した。
- ・なお、入場時にアンケートを配布し終了後、アンケートを回収した。（回収率67.1%、219名）
- ・次に当日の会場の様子を紹介する。

【会場の声】として一部アンケート結果を掲載した。

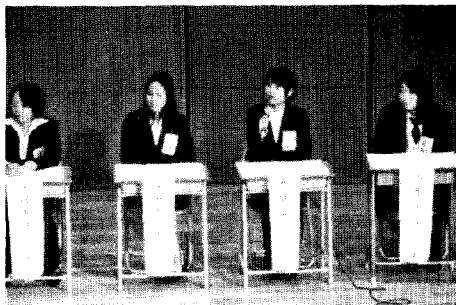
第1部 食育ヤングリーダー育成支援事業参加校の活動発表会



【会場の声】 非常に良かった・良かった（97%）

第2部「竹下和男先生と食育ヤングリーダーとの公開セミナー」





【会場の声】 非常に良かった・良かった (97%)

第3部「食育ヤングリーダー育成支援事業」 表彰式



相愛大学は
大阪府知事より
「特別賞」を受賞
しました。

【展示コーナー】



【審査結果】

最優秀賞：大阪大谷大学

優秀賞：大阪府立園芸高等学校・帝塚山
学院大学（人間科学部）

特別賞：大阪府立茨木西高等学校
相愛大学、帝塚山学院大学(畑部)

奨励賞：大阪府立芥川高等学校・大阪府立
北かわち阜が丘高等学校・大阪府
立能勢高等学校・大阪女子短期大
学・大阪成蹊短期大学・大手前榮
養学院専門学校・箕面学園福祉保
育専門学校

《審査員講評》

「食育ヤングリーダー育成支援事業」表彰式
では、相愛学園学園長の大谷紀美子先生が審査
員として講評を行いました。

よかった展示は？

- ・大阪産（もん）の紹介 (29%)
- ・マジごはん (22%)

【作成したチラシ】

マジごはんby OSAKA
“ちゃんと食べよか〜”
推進プロジェクト 無料
YOUNG LEADER FORUM

平成24年
日 12月26日
13:00~18:30 (開場 12:30)

相愛学園本町学習館
 (大塚南中央駅西口4-1-22)
 地下鉄「本町」駅西口徒歩4分出口3つ

第1部 13:00
食育リーダー育成支援事業
第3回の公開セミナー
めざせ!! 食育リーダー

参加校
 ●大阪府立河内湖高等学校
 ●大阪府立東大田高等学校
 ●大阪府立藤原高等学校
 ●大阪府立北花田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校
 ●大阪府立津田高等学校

第2部 15:00
竹下雅男先生と
食育リーダーとの
公開セミナー

コーディネーター：竹下雅男
 講師：竹下雅男先生(大阪府立津田高等学校 校長) 食育推進委員(大阪府) 竹下先生との対談
 司会：(司会進行) 志保先生、(司会進行) 志保先生、(司会進行) 志保先生、(司会進行) 志保先生
 参加校：(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生
 参加校：(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生
 参加校：(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生、(参加校) 志保先生

第3部 18:00
「食育リーダー」
育成支援事業」表彰式

共 催 農林水産省近畿農政局大阪地域センター、大阪府、相愛大学
 後 援 (社)大阪府農林水産部、相愛大学総合研究センター、大阪府環境緑地局中央センター、大阪府衛生保健推進協議会、
 協賛(社)P&F(株)、食育推進協議会

Asahi Sanwa Meiji

【注釈】

※1「マジごはん計画」とは

マジごはん計画は、第2次食育推進基本計画に基づき、若者を中心として消費者に対して、食について考える機会を提供する事で、食を見直すきっかけづくりを目標とした農林水産省の食育プロジェクト。

※2「食育リーダー育成支援事業」とは

「野菜摂取」「朝食摂取」「大阪産(もん)食材」をテーマに、子供や同世代に向けての健康的な食生活を送るための食育活動を行う。高校生及び大学生を支援し、若い世代の食育リーダーを育成支援する取り組み。

(文責 太田美穂)

【謝意】

本シンポジウムの実施にあたりご協力いただきました相愛学園事務局、相愛大学教職員の皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。

【実行委員会】

相愛大学 人間発達学部発達栄養学科
 水野 浄子 (副学長)、
 太田 美穂 (教授)、多門 隆子 (教授)、
 村井 陽子 (准教授)、堀野 成代 (助手)
 大阪府健康医療部健康づくり課
 西本香代子 (課長補佐)
 大阪府環境農林水産部農政室推進課
 谷 由美子 (主査)
 農林水産省近畿農政局大阪地域センター
 勝目 健一 (主任農畜産安全管理官)
 森本 素子 (農畜産安全管理官)